

息 子 た ち の 処 罰

— カフカの小説『判決』『火夫』『変身』研究 —

ノルベルト・エラーズ（ボン）

岡 光 一 浩 訳

要 約

カフカは小説『判決』『火夫』『変身』を「息子たち」という表題で一冊の本にまとめ発表したい意向をもっていた。罰せられるという息子たちのもつ共通性を彼ははっきり意識していたのである。そして彼自身この息子たちのなかに、まさに文学によって世界を克服したいという意志はもっているものともかく世界に負けてしまい父親と息子の関係の「純粹な結びつき」から踏みでた者としての自己を描いている。破滅するという必然性に抵抗することは、それがどんな抵抗であれまたそれがたとえ絶対必要であろうともむだなことである。（独文および英文— 訳者）

カフカの小説『判決』或いはその副題からいえば「物語」『判決』が1913年に発表された時、この作品に対する当時の人々の評価は種々雑多であり決して一定したものではなかった。カフカのテキストのなかの難解な点や解明しがたいところを指摘する程度のものであり、その目は特に息子に死の判決を下す父親の姿にむけられていた。カフカの「動きのない素朴で簡潔な叙述方法」を称賛したクルト・ピントゥスも、老ベンデマンは気が狂っていて彼の判決には決して正当性が認められないと規定しつつもなお彼には消し難い難解さが残ってしまうことを語った。¹ 15年後ヴェルター・ベンヤミンは、カフカがこの物語で問題としたのは墮落し寄生動物のような生活をおくる父親の世界の暴露である——「愚鈍、零落、不潔がこの世界の内幕である」——と確信をもって述べた。² そして今日まで老ベンデマンの姿は息子の姿よりも解釈者たちには魅力のある重要なものに映っているようである。こうした解釈においては父親の評価がますます肯定的傾向を帯びてくるのも当然のことであろう。要するに『判決』は息子の物語というよりむしろ父親の物語ではない

かという疑問が提出されているように思える。

同じ1913年に、後のアメリカ・ロマンの序章が『火夫、ある断篇』という表題で発表されると、カフカの文体の簡潔さ、成熟さを称賛する批評や、(オスカル・ヴァルツェルのように³)登場人物の配置の巧みさを強調したり或いは(ローベルト・ムーシルのように⁴)表面的な構成のまずさを指摘する批評が現れた。しかしその評価はもっぱら、なんら重要な印象もよびおこさず、また表題の人物である火夫も実際には決して特別生き生きとイメージをもって現れてこないこの物語に対する理解の難しさを挙げているものであった。『火夫』がカール・ロスマンの人生の一章を、つまり『失踪者』の一章をなすであろうことは批評に現れるはずはなかったし、罰せられる息子の物語が語られることになるとはその時点では全く予期せぬことであった。

『変身』は少々事情が違っていた。1915年にやっと——下書きはすでに3年前に書かれていた——発表されたこの物語の中心にグレゴール・ザムザがいることを疑う人はだれもいなかった。しかしおそらくこの作品においても、父親によって下された罰が変身によって生から死に落ちたグレゴールにむけられるとはだれにとっても信じることのできないことだったろう。

3人の息子たちの物語——とカフカ自身『判決』『火夫』『変身』を考えていた。1913年4月11日の出版者クルト・ヴォルフ宛の手紙のなかで彼は次のように書いている。これらの物語は「外面的内面的にも互いに関連をもっています。物語のあいだには明らかな結びつきが、またそれ以上に密かな結びつきがあります。『息子たち』という表題ででも一冊の本にこれらをまとめてその結びつきを表現したい気持を私は抑えることができません」⁵と。実際にはこの作品集は発表されなかったが、そのことでこれらの作品の関連性になんらの影をなげかけるものではない。

この3つの物語が罰というモチーフによっても互いに関連性をもっていることもカフカは同じように証言している。1915年10月15日彼は出版者に「罰」という表題で物語『判決』『変身』『流刑地にて』を一冊にまとめ発表したい旨を申し出た。(この計画も一年間の話し合いの後同じように放棄された。)ところで罰せられた息子たちゲオルク・ベンデマン、グレゴール・ザムザの仲間にカール・ロスマンも罰せられた息子として加えることができるよう。カフカもロスマンは確かに罪もないのに「罰せられて殺され」そして「うちのめされるというよりむしろわきへ放り出されるのである」⁶と1915年9月30日の日記に書き留めている。ロスマンの罪のなさや彼の罰の執行のされ方は彼の若さや関連がある。つまり彼が16歳そこ

そこでなく、ヨーゼフ・Kのように30歳であったら、彼の罰も罪の結果であつたらう。ゲオルク・ベンデマンとグレゴール・ザムザが罰せられて殺されるのは決して罪なくしてのことではないのである。

カフカの施した注釈を信じるにあたっていると考え、それを解釈の手がかりとして用いてきたのはカフカが生活においてであれ仕事においてであれ、作家としてであれ注釈者としてであれ、私的であれ公的であれ、或いは他の二元性においてであれ決して分けて考えることのできる人物ではないという確信からであった。おそらくカフカは今世紀のドイツ語圏のどの作家ともちがって、すべての点において自分自身にあくまでも固執した作家であると考えていざらう。書くことは彼にとって身体の一部であると彼はいつている。カフカにとって書くことは確かに、非常に複雑でそれ故に精神分析学者たちによって何度も熱心に考察を加えられた彼の人格のまぎれもない構成要素なのである。このような特性をもつカフカを大まかにでも把握するためには作品の徹底的研究と時代と状況との包括的研究が不可欠であろう。

「書くことが私の本質の一番効果的な傾向であるということが私の機構のなかではっきりした時、一切のものがその方へ押し寄せてきて、性や飲食や哲学的思索や音楽の喜びに向けられていたあらゆる能力を空回りさせた。私はこれらすべての方面で身体をやせ細らせていたのである。」⁷

この論文で扱う3つの物語の着手の年でもある1912年の日記にはこのようにある。——1912年11月1日のフェリーツェ・パウアー宛の手紙には次のように書かれている。「私の生き方はもっぱら書くということのみに向けられています……」⁸と。或いは少し後の1913年4月20日の手紙には次のようにある。「書くことが私の唯一の内的存在の可能性であることをあなたは十分に理解していなかった」⁹と。また次のような手紙もある。「私は文学的関心をもっていうのではなく、むしろ私は文学でなりたっているのです。私は他のなにものでもないし、他のなにものになることもできないでしょう」¹⁰と。しかしこのことが真実なら——それも真実で、しかも正しいことを多くの事柄が保証している——カフカ解釈においてはつねに生活と作品のこのような結びつきに、そして——様々なアンティテーゼを包含する——カフカという人物の統一に目を向けることが不可欠になってくる。社会学的解釈、受容美学的解釈、マルクス主義的解釈、精神史的解釈、精神分析的解釈は魅力のある、それぞれにおいても成果の多い解釈であることは確かである——しかしライプツィヒで刊行された作家辞典のように、カフカは「人間と市民社会との複雑な関連を描くことによって、奥深いところのものを(戯画化して)我々のまえに提示してくれ

たが、決して彼は様々な現象の本質をつかむというところまでいっていない」¹¹ といってしまうはもうなにかを況んやである — が、しかしこれらの成果は大いの場合研究対象にというよりもその解釈の方向性に規定されているといってい。これらの解釈は自己の主観を客観化すること以外にはなにも意図せず、しかもまずなによりも読者のためというよりむしろ自己自身のためのものであり、作品の側からというより解釈者の側からでているものである。

カフカが作品を書いたのは自己の生の状況をおよそでも表現できる対話相手を自分のために獲得するためであった。そして彼が作品を発表したのは自己の没入的主観性に共有的主観性の印象を与えるためであり、対話相手を、つまり文学という形態のなかの自己を確認するためであり、そして作品からのがれることができるためであった。そしてまた彼自身変化する将来の諸々の事態においても相変らず批評を加えることのできる者として、つまり変化することのできる者としてありつづけるためであった、従ってすべてはもっぱらカフカ自身のためであったといえることができる。こうした前提から導きだされる結果をひとつ挙げるとすれば、次の点があろう。つまり、カフカが多くの作品を発表しなかったのは彼自身がそれらの作品を文学的に失敗作だとみなしたからではなく、むしろそれらが没入的主観性の欠如からそこに深刻になりうる対話相手を獲得することができないと考えたからであった。こうした視点は今日まで汗牛充棟のカフカ文献のなかにあっても重んじられたことはなかったが、これに反対する論証も誤った伝記に基づいているゆえにほとんど反論とはなっていないのが現状である。

トーマス・マン、ベルト・ブレヒト或いはシュテファン・ゲオルゲの場合とちがって、カフカの作品理解には決して解釈の原則に対して身勝手な評価が許されるべきではないが、作者という人物について考えておく必要がある。つまりカフカの文学作品は意義や意味が追求される以前に、作者の立場を規定するものとしてうけとられねばならないのである。その立場は確かに解答できない疑問にかまれているかもしれないが。換言すれば、カフカの作品において重要なのは彼の世界への報告を探すことではなく、彼が作品の発表によって、いわば自分自身をさらけ出すことによって文学作品を通じてどのように自分自身を確認しようとしているかを認識することである。自己への接近であり、同時に自己からの逃亡であるとみなすことのできる彼の種々の試みがうまくゆきそうでない時でも彼はその必然性を否定する言葉はなにひとつはなかった。1911年11月の父親に宛てた発送されなかった手紙のなかでカフカは次のように述べている。

「私はものを書いたり、それに関する事柄において小さな独立の試みや逃亡の試みをおこなったが、ごくわずかの効果をあげたにすぎなかったことをすでに申し上げておきました。その試みはほとんど長続きしないだろうことは事柄が証明していますが、それにもかかわらずその試みに気を配り、防げるかぎり危険を、いやそうした危険の可能性さえもそれに近づけないようにすることが私の義務であり、いやむしろ私の人生であるといつていいくらいなのです。」¹²

短期間のうちに — 1912年9月から12月まで — カフカは『判決』『火夫』『変身』を書いた。これらの物語を彼は主題とはなっていないが、3つの物語のどれにも同じように余韻を響かせている精神的靈感にふれて書いたのである。彼はこれらの物語をためらうことなく発表する決心をした。共通性が多いという理由から、ひとつの共通的观点のもとでこれらの物語を近づけて考察してみようという決心からであった。

カフカが作品をまず第一に自分自身のために書いたということが正しいとするなら、『判決』に掲げてある献辞に特別な注意が払われる必要がある。表題の下には「フランツ・カフカによるフェリーツェ・B嬢のための物語」と書き込んである。この意味からすればこの物語は名前のあがったフェリーツェ・B嬢に献げられた物語というだけでなく、— ちょうどゲーテがシラーとの往復書簡を皇帝陛下であるバイエルンの王に献げたように — 直接彼女のために書かれた物語であり、従ってフェリーツェ・B嬢の物語といふことができよう。後にカフカがミレーナに語った「伝えることのできない事柄を伝え、説明しがたい事柄を説明する」¹³ 多くの試みのひとつがこの物語なのである。様々な経過から変化が生れてきて、第2版（1916年）ではカフカは「Fのために」という献辞で満足しなければならなくなり、さらに第3版（1920年）ではそれさえも彼は断念した。

1912年8月13日フランツ・カフカはベルリン出身の速記タイピストフェリーツェ・パウアーと友人マックス・ブロートのところで知り合った。数週間にわたり彼には文学的実のりのない苦悩に満ちた日々が続いていた。書きあげたわずかなものも使いものにならず、彼はすぐにも破棄してしまった。この女性の出現はカフカに特別な影響を及ぼすこととなった。彼女の姿・形に彼の心はとらえられたのである。（彼は日記に以下のように記している。「骨ばって、その無意味さを率直にたたえている無意味な顔、むきだしの首……ほとんどつぶれた鼻、いくぶん剛く魅力のないブロンドの髪、とがったあご、腰をおろしながら、私は初めて前より注意深く彼女をみたが、坐っているときすでに私はうごかしかがたい判決を下していた。」¹⁴

この判決は彼自身の心と彼のフェリーツェに対する関係を表現したものであった。) 数週間のちカフカはフェリーツェ・パウアーと手紙の交換を始めている。そのなかには文学と生活とが解け難く融合しあった形で表現されている。1912年12月の月日は手紙だけでなく、物語も書いているうちに、つまり陶酔してものを書いているうちに過ぎてゆく。そのとき書かれた物語のうちの最初のものだけがはっきりとフェリーツェのためにと命名されたのであった。つまりその当時はカフカにとって文学することが生活することだったのである。

9月22日から23日にかけての夜、カフカは『判決』を一気に、ふつうでは考えられない速さで「非常な緊張と喜び」のうちに書いている。彼は日記に次のように書き留めている。「本当にこういうふうにしてのみ、このような状態においてのみ、つまり肉体と魂とがこのように完全に開放されるのでなければ私は書けない」と。簡単に型にはめていうならば、おそらくカフカの肉体と魂の開放は愛情関係 — 婚約そしておそらくそれ以上のもの — の好転によるものといえるかもしれない。希望が満たされない代償行為として文学的実のりがまさに噴出するように現れるといった意味でのことであるが。(愛は「もっぱら文学によって或いは性交によってのみ」満足がえられる¹⁶とカフカは1911年11月5日の日記に書き留めている。二者択一の重荷から彼は後にこの二番目の可能性の自信を失った。) さてカフカはどのようにしてフェリーツェへの愛をひとつの物語に結晶させたのであろうか。

『判決』のドラマはひとつの展示部と性急に効果をあげるためのひとつの幕から成っている。つまりゲオルク・ベンデマン — カフカははっきりとこの名前が彼自身の名前と密接な関係があることを指摘している — はフリーダ・ブランデンフェルト(フェリーツェ・パウアーのことが思いだされるとカフカはたびたび念入りに書き留めている)と婚約し、ペテルスブルクに住んでいるあまりうまくいっていない一人の友人にフリーダに請われるままその報告をしようとする。ここまでが展示部であり、このあと本来の筋の展開がなされる。ゲオルクは友人に宛てた手紙のことを報告するために父親のうす暗い部屋に入ってゆく。妻がなくなってからますます弱くなっていた父親はゲオルクがペテルスブルクに友人をもっていることを信用しない。ゲオルクは父親を気が狂っていると思いベットに運ぶ。父親は跳びあがり息子を非難する。おまえのまえでスカートをまくりあげた「あのいやらしい娘」と結婚するために、おまえは友人を裏切ったのだ、そしておまえは父親であるこのわしをベットへ片づけようとしたのだと。「おまえは本当はもともと無邪気な子供だった。だがもっと本質をいうとおまえは悪魔のような人間なのだ — だからよく聞け、わしは

今おまえに溺死の刑を宣告する！」そしてゲオルクは彼自らその判決を実行する。橋から水のなかへ落ちてゆくまえに、彼は「お父さん、お母さん、私はいつもあなた方を愛していました」と最後の言葉を発する。「この瞬間、橋の上をほんとうに限りない車の列が通り過ぎていった。」

カフカは『判決』に対して、彼の作品のうちの少数に対したのと同じような評価を下した。彼はこの物語の「内的真実」を強調したのである。これは確かにいつも「認められたり否定されたり」するものであり¹⁷、実際書くことによって自己を集中し、まぎれもなく普通とはちがった状態にはじめてなりえた——極めて幸福な場合である——カフカ自身もまたそうであったものである。それ故に彼はまさにこの物語において、自己の外に出、自己を客観化し、従って批評の加えることのできる者として立場をとることができたのである。

カフカはさらにこの物語に熟考を加え、これが父親と息子の関係をかたる物語であることを知った。「友人は父親と息子のあいだを結ぶものである……」¹⁸と。こうした結びつきから父親が浮びあがり、友人を失い婚約者をまだ妻としていないゲオルクと対立する。「まだ結婚式がおこなわれていないために婚約者は父親と息子をめぐる血縁関係にふみ込むことができず……父親によって簡単に追いたてられてしまう」とカフカは書いている。そしてさらに、ゲオルクは結局もっぱら「父親をみつめる」だけであり、それ故彼から父親を完全に閉めだす「判決」は非常に強く働くのであるとも彼は書いている。つまり婚約者は父親と息子との対立の解決には役立たないものと考えられているということが出来る。何度も手紙で『判決』は「小さなあなたの物語」ですと書いて送った¹⁹ フェリーツェに対して、カフカはこの物語はなにひとつ説明のできない小説であり、我々に関連するところは全然ありませんと注釈を加えて、正確に自分たちにあてはめて解釈することの誤りをといたのであった²⁰。

しかし日記にはもっと多くの、もっと重要な事柄が示されている。例えば「私の場合〔フェリーツェとの関係〕からの『判決』の諸々の結論。私はこの物語を間接的には彼女に負っているのである。しかしゲオルクは婚約者がもとで破滅する」²¹と。これはまさに婚約者フリーダ（フェリーツェ）が結婚の意志の告白のなかに示したその性格でもって息子に結婚を迫ったことを意味しているものにほかならない。カフカの決して一時的ではない確信からすれば考えられるような親密な関係を、つまり息子の父親への依存或いは（正当な）父親の権力によって特徴づけられる父親と息子の関係を欲している息子に彼女は結婚を迫ったと考えられる。息子は父親に対して違反を犯し、物語のなかで友人の姿に具現化されている共通の第三者を野卑な肉

体の魅力しかもたない本質的にはなんの縁もないもうひとりの人間のために見捨てることによって2人の関係を破壊している。息子は父親に罰をうける以前に人間同士のあいだに存在する唯一と思われる純粋な関係からひとり勝手に遠ざかっていたのである。(そのような関係をひとつの「純粋な」結びつきとしてカフカは結婚生活に反対する論拠を、とりわけ自分の結婚に反対する論拠を集める時、特に好んで語っている。)

父親は息子の離反をずっと以前から知っていた。彼は息子が自分に挑戦をいどんでくるように思えた時、最初のチャンスを利用して息子を肉体の死へと導いたのであった。ゲオルクはずっと以前父親から精神的道徳的に遠ざかっていたが、今や肉体的にも遠ざかることになる。溺死による死は任意の自殺ではなく考えた末のことなのである。死体は河の流れに運び去られていくので、決して同じ場所につまでも留まることはないという計算からである。溺死者の安らかさのない様子が死をこえる罰であると考えられるか否かはここでは問わないことにするが、いずれにせよ、父親と息子の純粋な結びつきが回復しない以上離反は決定的であり、底深いものとならざるをえなかった。こわれた愛は決して回復することはないのである。父親と息子の離反がどのようなものであったかは「お父さん、お母さん、私はいつもあなた方を愛していました」という息子の最後の言葉をひきだしたあの父親の「私がおまえを、私から生れたおまえを愛さなかったと思うのか」という悲痛な問いが明らかにしている。

ところで父親と息子の関係が完全に切れているときに、息子が父親に対して違反をしたからといって必ずしも罰せられねばならないことなのだろうか、どうしてゲオルクは父親の判決をわが身におこなったのだろうか、どうして彼はたち去って婚約者であるフリーダと結婚しないのであろうか、父親が活着しているうちは彼に権力を行使するであろうことは確かであるが、その権力は決していつまでも存在するものではないのである。事実父親は判決の宣告をおこなったのちは激しい衝撃をうけてベットに転倒している。彼はもう終りなのであり、決して権力をいつまでももち続けてゆけはしないのである。父親が死に、そのあとに息子の死がやってくるのが常である。

ゲオルクにとって罪を償うことがある程度問題であったろうことは確かだが、彼の自殺の決心においてもっと重きをなしたものは死の芽をもちそれ故死そのものといっていい生から離れることのできるチャンスを彼が手に入れたという見解であろう。ゲオルクの自殺はカフカによってしばしば充分考えられた末のことであった。

そしてその自殺は彼が世界で完全に自分を見失うまえのことであり、そこへの没入によって世界との一致をなくすまえのことであり、或いはそうした没入においても自己を見失うことをかりにくいとめることができたとしても、それは世界との戦い、つまり全く見込みのない戦いをうけ入れるまえのことであった。あたかもカフカにおいて決定的 役割を演じている決して回復することのない人生の傷がそうするように合図しているかのようである。実際『判決』の事情は以上のものであり、多くの解釈者が益もなくかかわっているただ単なる父親と息子との世代間の葛藤というより — 首尾一貫しているゆえに — もっと厳しいものである。婚約者はカフカの多くの物語と同様、『判決』においても事件の中心へと動いてはいない、むしろ主人公と関連するという姿勢をそといつまでも続けるかのように終始その外側に位置している。しかしゲオルクの運命はこの婚約者に決定されるのである。彼女は判決を下すわけではないが、それをひきおこす原因になっている。換言すれば彼女のためにゲオルクは罰をわが身にひきうけるのである。しかしこのことによって彼はもうひとつの罰はのがれることにはなるのだが。

カフカは1913年8月14日の日記のメモに「しかしゲオルクは婚約者がもつて破壊する」と、そしてさらに続けて「結婚の幸福に対する罰としての性交、できるだけ禁欲に独身者よりももっと禁欲に生きること、これが私にとって結婚生活に耐える唯一の可能性である」と書いている。こうした肉身上的の叙述は恋人同志のあいだの亀裂をみせているのみならず、カフカの意見に従えば2人の人間をそれぞれ2つの型に、つまりてっとりばやくいえば肉体的（或いは官能的）と精神的という概念で性格づけできる型に引き裂くものでもある。またこの亀裂は意識に上るとなると致命的になり、人間放棄につながってゆく。従って結婚生活を長く続けるためには非常に厳しい禁欲（肉体的なものの従属）か或いは肉体的なものへの没入（精神的なものの従属）が必要となる。カフカの『判決』において問題となる現実面 — 彼のフェリーツェとの関係 — についていうなら、一方は婚約者にも問題とはならなかった（当時のカフカの手紙や日記はそのことについて何ひとつ疑い点を残していない）が、もう一方はカフカ自身にとって鼻もぢならないことだったのである。

『判決』と自分自身の状況との関係をはっきりさせると同時にカフカは結婚について自分の賛否の気持を集約して示している。そのなかのおそらく最も重要と思われる論拠を彼は次のように表現している。「結びつくことの不安、流されることの不安、そのとき私はもはや決してひとりではないのである」²²と。孤独を失う状態へ流されないようにゲオルク・ベンデマンは — 水の流れに落ちてゆくことによって —

死へと入ってゆき、それでもって自分の孤独を決定的にそして永遠に救うのである。落ち込む際ゲオルクはもう一度長く生きることのできなかった世界の騒音を耳にする。「この瞬間、橋の上をほんとうに限りない車の列が通り過ぎていった。」彼の生きることと書くことによって築かれたアンティテーゼの構造をなんとなく適格に表現できるひとつの簡潔な観念をカフカはこのような最後の文章で表わしたのである。「ねえ君、あの最後の文章がなにを意味しているか知っているかい」と彼はマックス・ブロートにたずね、次のように答えた。「私はあの時、強烈な射精のことを考えていたのだ」²³と。

カフカはゲオルクの運命の物語を書いたことで、以前とは全く異なり、ものを書く過程において邪魔の入らない生活というものがいかに幸せなものであるかを知った。彼は死者のように全く孤独だった。（「私は書くことのために孤独を必要とする、世捨て人のようにはではなく——それでは充分ではないのだ——むしろ死者のようにである。」²⁴）心を統一できるこの状態をきまぐれに——結婚という結びつきによって——放棄することで彼の心は不安に高鳴った。こんなとき父親が、すでにたびたびずうずうしい女たちがスカートが高くもちあげることをゆゆしくいまわしいことと非難していたカフカの父親が、死によって自己との一致を保持する瞬間の恩恵が彼に与えられるよう権力者の至上命令を宣告すべきだったのである、がしかしカフカには助けはやってこなかった。父親は彼の判決を下さなかったのである。（このことは息子をしばしば不思議がらせた。）それ故に彼には書かなくてはならないという重荷とさらに次のような死ぬことと死についての観念が残ってしまった。

「臨終の床で満足していられると思っていた私にとって、そのような〔死ぬ〕叙述はひそかにいうのだがひとつの遊びである。私は瀕死の時にあっても死ぬことを喜んでいるのです。」²⁵

★

ロマン『失踪者』の最初の構想（或いは初稿）をカフカは1912年夏すでに放棄していた。『判決』を書きおろした直後に彼は新たに書き始めている。マックス・ブロートは9月29日、「カフカは忘我の境地にある」と、10月1日には「カフカは信じられないほどの忘我の境地にある」と、そしてさらに次の日には「カフカはまだ非常な靈感を受けつづけている。一章はできあがった」²⁶と書いている。ロマンの序章は『火夫、ひとつの断篇』という表題で1913年5月ライプツィヒのクルト・ヴォルフ出版社から独立した作品として発表された。この出版者にカフカは次のように語っていた。「これはひとつの断篇です。将来も断篇のままでしょう。こ

うした将来性がこの章に大部分の完全性を与えているのです」²⁷と。ここには、不完全なものを完全なものにすることを望まない決意が決定的であり、しかもこの断篇が決定稿であり作品の可能な展開の目的を充分かなえているといった二重の意味でそうであることが示されている。断篇であることが火夫物語の特徴になっている。

「16歳のカール・ロスマンはある女中に誘惑され、その女とのあいだに子供ができたというので、貧しい両親によってアメリカへやられたのだが、彼がすでに速度をさげた船でニューヨーク港へ入っていった時、ずっと前からみえていた自由の女神の像がまるで突然強くなった陽の光のなかにあるようにみえた。剣をもった女神の腕がまるでつい今振り上げたばかりのようにそびえ、その姿のまわりには漂ような風が吹いていた。」

このように『火夫』²⁸は始まるのだが、この冒頭には重要な啓示が与えられ、かなり多くの重要な暗示が示されている。カール（すぐさまカフカが思い出される）は明らかに貧乏とは思えない両親によって——この従順な息子にとっては彼らは「かわいそうな」という意味で「貧しい」ように思われる——アメリカに追いやられた。女中の誘惑（カフカもこのような経験をしたことがあった）が好ましくない結果をもたらしたという理由からであった。カールは自由を奪われたゆえに自由の国と自由の女神の立像を特別な目でながめる。なにかを期待する気持から彼には陽の光が突然以前より強くなったように思えるのである。彼は自分では的確な目でものをみることができると思いこんでいるが、実際はまちがった目でものをみている。つまり女神は手に剣ではなく松明をもっていることは明らかである。しかしカフカはここで誤りを犯しているのではない。もし誤っているのであれば、ある批評家が彼に自由の女神は実際なにをもっていると思うかと書いてきた時、彼は『火夫』の第2版（1916年）の発表の際その個所をまちうけて訂正したであろうから。いや確かに保護者を必要とする子供であるカール・ロスマンには本当にそれは剣にみえているのである。そしてそれはおそらく彼の慰めになっているのであろう。カールが剣を抑圧や拷問の道具として認識していることを肯定するような解釈の手がかりはテキストにはない。つまり剣はロスマンのある唯一の過失に固執されてはいないのである。虚偽を事実とみなし、それが一面的であるという理由でさらに誤った評価をひきおこす、こうした二重の誤解がどういふ結果をよびおこすことになるか——致命的な結果である——はアメリカ・ロマンの全体が明らかにしてくれるだろう。

（このようなものの見方——もうひとつの可能な見方も同様——を可能にするの

は語り手の控え目な態度である。つまり、カフカは距離をおいた平静な叙述、分別をもった優越、解釈や評価といったものを放棄しており、いわゆる語り手カフカは全く前面には出てこないのである。このことは容易に理解できよう。カフカにとって語り手の客観性は全く存在しないのであるから。書くことによって自分自身をもっと詳しく知ろうとする試みには、行為や思考のうえで知ることのできる事柄を主観的に観察したり評価したりすることが特に強く必要とされる。いずれにせよカフカの語り手の立場が一見客観的にみえたとすれば、それは疑いなくすべての事柄が主人公の——或いは主人公の相手役の——主観的展望から考察されているからである。))

ところで『火夫』ではなにがおこるのか。船を去ろうとしてカールは傘を忘れたことにきずき、この保護の対象物を探して歩き、そして火夫の船室に迷い込む。火夫は機関長が不正をおこなっていると彼に話す。カールは火夫の代弁者になることを宣言し、高級官吏の同席のもと船長のまえにでて火夫の権利を主張する。しかし徒勞におわってしまう。同じ船に乗っているひとりの男がカールの伯父であると名のりてくる。2人は一緒に船を降りる。「実際もう火夫はいないかのようだった。」

カール・ロスマンは道徳的にも法律的にも責任のない事柄が原因でアメリカに追いやられるという罰をうけ、そのため彼の自由は奪われてしまう。「客観的にみて」彼に罪のないことは疑いのないことである。両親或いは女中に罪があるかどうかは、別問題であるが。カールは愛情をこめて両親のことを思い出しているし、彼らに苦痛を与えたことを気の毒に思っている。彼にとって恐怖なのはアメリカに追いやられて自分がどのようになるかではなく、罰せられたことによって生れてくる不可避的なこと、つまり両親に苦痛を与えることなのである。彼はアメリカに追いやられたことに関連しておこる出来事にいやな思いをしたのであった。「恐しくみじめな気持ちにおそわれた」ことを彼は思いおこしている。このような或いはこれに似た関連性の表現はカフカの他の物語や日記のなかにもしばしばみつけられる。つまり家族関係はいつも人間を危機にさらすものとして、自分を見失わせるものとして、人を威嚇するものとして描かれているのである。カフカがこうした関連性を引きだすのは女中の罪を実証するためでも、カールの無罪を証明するためでもない、人間——子供であろうと大人であろうと無関係に——は家族関係において自己の調和を失い、みじめな状態に陥るものであり、そしてそれかといって決して助けを期待することはできないことを述べたいためである。カールは今や失った調和を取り戻すことはできないが、ひょっとしたらもうひとつの調和を見つけだすことができるかもしれない

と考え、新しい生活領域のなかへと突き進んでいく。(こうした考えの破壊をこのあとこのロマンは語っている。)

ゲオルク・ベンデマンが父親に死の判決を下されるのと同じようにカールも父親に新しい人生へと判決を下される。両親から永久に別れる——意識してか否かはどちらでもよいことである——ことによって彼はこの判決をひきうけることになる。つまり傘は失くなり、今また彼と両親をつないでいたすべてのもの——ヴェローナ・ソーセージも含めて——をしまいこんでいたトランクもカールは置き去りにする。両親をして過去とのこのような離別は新しいものが生れてくるためには不可欠であるように思われる。ひょっとしたらこれは自分自身へたち還る行為なのかもしれない。少年カールはこの方向でひとつの試みをするが、みじめに失敗する。つまり彼は火夫のベットに入り、そこを気持よく感じるのである。(火夫、すなわち社会の最下層の代表者であり、アウトサイダーであり、罰をうける人であり、そして温めることを職業とする男である——カールが火夫のベットに入ることと同性愛的な要素が一枚かんでくるかどうかは今は保留しておく。)カールは火夫のベットで心地よく感じ、どんな心配ごとからもときはなたれている、とりわけ女中とともにしたベットの思い出からときはなたれている。自由に生きることができるかもしれないという望みが少しのあいだひらめく。火夫のベットではどんな支配も届かないように思われるのである。しかしこうした思いはこわされ、すぐにもそれを阻止するものが現れる。火夫の船室に男たちの行進の音が大きくなります大きき響いてくるのである。「その人たちは一列になって歩いているようだった。武器のなるようなかたかたという音がした。」船のバンドの行進は火夫とカールを行動へと促すことになる。

カールは今や世界に順応すべく次の可能性を試みる。彼は火夫と意気投合し、火夫を友とし、まさに自分の(失った)父親の立場に彼をおくのである。しかしそれにもかかわらずカールの方が父親カール・ロスマンといったふうであり、彼の方が父親の権威ある態度をとっていたのである。この可能性を求める闘争は物語の展開に組みこまれ、そして代父がカールを罰することになる。

カールは火夫の権利のために戦う。ところで彼は自分がなにを行うべきか知っているのだろうか。カールにとってそもそも問題なのは火夫なのか、それともつねにもっぱら自分自身だけなのか全く疑しい。広い世界に追いだされた——傘をもってではあるが、決して充分保護されているわけではない——彼は挑戦的に剣をふりあげている自由の女神をまえにして服従を強制する権力の排除をまちのぞむのである。

このことはカールや火夫の描写にはっきり示されている。しかしカールは種々の問題において部分的にしか火夫と一致をみないという理由から彼と一緒にではなにとつ得るべきものはないとはっきり認識する。なぜなら火夫がいかなる理由からであろうと、自分自身の問題に関して思いがけなく現れたこのむこうみずな弁護士カールとは全くちがった判断を下すからである。火夫は支配関係にあることを根本的に問題としているのではなく、もっぱら自分自身の利益をあげることに、つまりできるだけ不利益を少なくすることにしか興味を示さない。船長のまえでカフカが気づいているように、火夫はほんのわずかしが役割を演じない。カールが代弁者として援助をおこないそして失敗するのは火夫がその援助を偽りだとみなすような人間であることを彼が全く知らなかったからである。カールは火夫が本当に不当な目に会ったことを信じる必要は決してないのである。火夫は自分に与えられた父親としての役割をほんのちょっとした場面でしか演じない。つまり、カールを退け、彼が倒錯した父親と息子の関係においてのみ可能な援助を——自分勝手に見込みもなく——おこなうと約束したことで彼を罰する場面においてのみである。火夫からなにも期待することがなくなったこととはっきり認識すると、カールはその舞台から姿を消す。今度は伯父とともに新しい試みをしようというのである。このローマンには同じことの繰返しがおこなわれる。カールは今度は次の代父である伯父によって、なじみの方法で罰せられることになる、つまり追放されるのである。



カフカの見解によればとりわけ家族関係によって表現される世界への自失や、それを原因とするいわば「自然な」父親と息子の結びつきを破壊し、いつも変化しようとする息子の側からおこなわれる亀裂によって示される人間の分裂（カフカの場合同父親はほとんど常に堂々とした不滅の存在であり、それ故に父親にはどんな人生感の動揺によってもそこなわれてはならない判断や裁きの譲渡できない権利が与えられている）——つまり息子の父親からの離反、その後におこる明白なる追放、そして罰、こうした図式は『判決』や『火夫』や『変身』におけるように、カフカにおいては何度もみとめられるものである。グレゴール・ザムザ（またもやカフカによって裏づけされた明らかなる符丁である）もまたベットのなかで不幸にみまわれる息子である。

「或る朝グレゴールは不安な夢からめざめた時、自分がベットのなかで巨大な毒虫に変身していることに気づいた。」

この思いにカフカは1912年11月17日の朝ベットのなかでとらえられた。彼は起きようとはしなかった。それはフェリーツェから完全に交際を拒否されたと思っていたからであった。彼は交際の知らせを今か今かと待ち望んでいた。その後すぐにもその知らせはやってきたのだが、彼はそれと同じ日に、とほうもない死にいたるほど孤独の物語を、つまり毒虫がどのようにして三幕のなかで死んでゆくかの物語を書き始めた。その完成にカフカはほとんど三週間を要した。しかし彼は物語の結末に全く満足を感じなかった。すでに11月24日フェリーツェに宛てて書いているところによれば、彼はこの物語全体を「特別吐気をもよおす物語」とみなしていたのである。そして同時に彼はこの物語を自己浄化の試みとみなす立場にたっていた。それ故にフェリーツェはこの物語を絶望した人間の嫌悪の部分と受けとり、決して悪意を抱くのではなく、むしろ理解を示してやらねばならなかったのである。彼は彼女に（何度も）「書くことは私に生きる権利を与えてくれるものです」と、そしてさらに（ある時）、「フェリーツェ、あなたは私にとって生きる第二の権利です」²⁹と語った。

（書くことと愛することとの関係についてカフカの時おりおこなう考察はおそらく理論的には支持することができる。しかし実際にはカフカにおいて生きるためのこのふたつの権利が同時に存在したことはなく、もっぱらふたつのアンティテーゼのあいだの——あれかこれかという——二者択一が存在したにすぎない。そしてこの二者択一も表面的なものにすぎなかったといえることができる。なぜならカフカは根本的には同等の権利をもつふたつのテーゼのうちのひとつを優位にたたせるずっと以前に、すでに前もって決定をおこなっていたからである。このあらかじめの決定はその後つらく苦悩にみちた過程を通して初めて最終的に——撤回可能ではあるが——決定へと、つまり書くことを選択する決定へと導かれてゆくのである。）

『変身』の第一章は変身しているにもかかわらず、あいかわらず両親とともに妹もいる家族の一員として、そして布地のセールスマンとしてこれまでの生活をどのように続けてゆくべきかと思いをめぐらすグレゴールの姿を報告している。またそこにはグレゴール自身の加えた傷、父親によって加えられたもうひとつのもっと深い傷、さらにはその毒虫が息子グレゴールであると知りつゝも、それを人間としてではなく獣のように扱う父親の姿が描かれている。——第二章はグレゴールに対する家族の者たちの関わり方を報告している。母は彼の姿をみたときとたん気絶し、父は彼にリングを投げつけ——そのひとつは「文字通りグレゴールの背中に」くいこむ——、最初彼の世話をしていた妹は次第に冷淡になってゆく。終章において両親に毒虫の

「処分」をすすめるのもこの妹である。グレゴールは背中中のリングが腐り死んでゆく。「彼は家族のことを感動と愛情をこめて回想した。」家族はほっと息をつき、新しい生活の準備にとりかかり、「将来への展望」は「決して悪くない」ものとして描かれる。

この物語は多くの点で『判決』に、いくつかの点で『火夫』に似ている、つまり同じように息子が遠ざけられるのである。しかしこれらの物語の詳細にわたる類似点を列挙する必要はないであろう、なにしろそれは明白なことであるから。それに反してこの物語全体における父親と息子の関係、そしてその描かれ方は他のふたつの物語と同じように問題をはらんでいるように思われる。というのは老ベンデマンがカフカ研究の進展に従ってますます肯定的——それでやっと中立を保っているといえるが——に考えられるようになったのに対し、老ザムザの姿は相変わらず一人の罪のない人間を処罰する横柄な専制君主として評価されているからである。この老ザムザに対する解釈は、死は耐えることのできない苦悩からの脱出であるという死んでゆくグレゴールに対する同情からでているものである。——『変身』が『判決』や『火夫』より多層的で多義的なことは疑いないことであり、そのため『変身』の決定的な解釈にもなにか不信の念をぬぐいさることができないことがあるかもしれない、しかしそのなかにあってもグレゴールが父親との関係に基づいているひとつの違反ゆえに罰せられることになるというテーゼを支持するに十分な解釈も若干はある。

息子に変身の判決を下したのが老ザムザでないことは確かであるが、その変身に関係し、最後には変身した息子に罰を与えて彼を死に陥し入れるのはまぎれもなく彼である。この彼の罰が正当性をもつなら、誤った人生のまぎれもない頂点において変身がおこなわれたと考えねばならないだろう。しかしその場合まず次のような疑問が浮んでくる。つまり罰せられた者が死に瀕しながらも愛をこめて罰した者を回想し、自分に加えられたことを、ゲオルク・ベンデマンが父親の判決に応じ、カール・ロスマンが父親の罰を苦情もいわず甘受するように受けいれていることはどのように解釈できるのかという疑問である。

グレゴール・ザムザは一生懸命働いて、今は隠居同然の生活をしている父の借金を弁済し、自分に依存する習慣のついている家族に裕福な生活をさせようとするが、厳しい仕事の圧迫と家族の一員としての結びつきの重荷から社会には適さない人間となり、そしてさらに家族の邪魔者、破壊者になってゆく。家族の者たちはといえば他人に依存することに慣れ、お互いの関係においても気力を失っていく彼の意の

ままになる彼の支配下の存在であった。家族の調和はずっと以前に失くなっていたのであり、とりわけ妹はグレゴールによって明らかに両親とは疎遠になっていた。

ずっと以前から孤立していたグレゴールが「家具を揺さぶるような」目覚まし時計の音を聞きもらしたほどの(すでに彼は自分の義務を怠っていたのである)夢から、自分の変身が先取りされておこなわれていたといいいい夢から目ざめると、彼はなにか見分けのつかないような、明らかに人間とはいえないような姿に変っていた。そして彼はそれに驚きもしなかった。このことはまさに事物の進展が確実に進んでいること、そしてずっと以前から始っていた人間的な事柄からの、つまり人間的な結びつきからの逃亡の動きが最高頂に達したことを意味しているといいいいい。ベットのなかで変身がおこなわれたということは確かにふしぎなことではない。というのはベットのなかほど無防備なところは他にはどこにもないからである。——ヨーゼフ・Kの審判もベットのなかでの逮捕で始っている。カール・ロスマンはかりに火夫のベットのなかでずっと続けていたなら、女中のベットのなかほど居心地よく感じなかったであろう。ゲオルク・ベンデマンは何故自分が父親をベットに寝かせようとしたかをよく知っていたし、父親はゲオルクがフリーダとベットを共にすることを許さなかった。又あの田舎医者は無気力の様子がみえるとベットに寝かされる。『田舎の婚礼準備』のラーバンはベットのなかで「クワガタ或いはコフキコガネのような大きな甲虫の姿」になったと空想する。流刑地での虐待はベットに縛りつけられている人間に対しておこなわれる等々——このようにベットのなかでは人間の自分自身や世界からの離反の夢によって、つまり想像上の「純粹な私」への帰還によってみにくい現実があばきだされる。毒虫になったグレゴールは仕事のつらさや旅行の難儀やお粗末な食事や人間的な交際のなさについて考えをめぐらす。「そんなことはみんな願ひ下げだ!」と。グレゴールはできるだけ早く仕事を辞職したいと思っている。つまり彼はすでに逃げる途上にありながら、なおも逃げたいと思うのである。彼は自分の変化に充分気づいている、しかしそれでもなお彼はこれまでの生活を続けていくことが可能で、なんら一般的支障はないと考えているようにみえる。これはまさに今や目にみえる現実となった毒虫としての存在に彼がすでに以前から大変近い存在であったことを意味するものであり、実際彼においてはすでにずっと以前(いつもではないが)姿、形、外観(これらは今は失くなっている)と本質、意義、実体とは互いに分離していたのである。そうであれば彼は人間の姿をもったもののなかでは生きてはいけないうらう。

グレゴールは自分自身と他のすべての人々との不一致を認識するまえに、自分の

変身した姿に対して他の人々がどのような反応を示すかと次のような思いをめぐらすのである。

「もし彼らがびっくりするならば、グレゴールにはもはやなんの責任もないし、落ちついていることができる。ところでもし彼らがみんな平然としているならば、彼としても興奮する理由もないし、急げば本当に8時に駅へゆけるはずだ。」

もはやなんの責任を感じる必要もなく、落ちついていることができること——これがグレゴールの強く願ったことであった。家族と仕事、両方は離れがたく結びついているものだが、彼にとって家族は仕事と同様非常に大きな重荷だった。

彼の会社の支配人はグレゴールが仕事においてははっきりとした退化現象をみせていたことを語る。母親も同様に確信をもってグレゴールの家族意識の衰退について報告している。つまりグレゴールは夜、家族と一緒にいても汽車の時刻表を調べたり或いは糸のこぎり細工に没頭したりして、全く子供同然であったのである。それにもかかわらず家族の者たちが、特に父親がグレゴールに完全に依存していたことは完全に倒錯した支配関係を示しているといっている。この支配関係は今や——よい方向へというわけではないが、自然な秩序にかなった方向へとむく——グレゴールの変身によって逆転する。そしてそのことによって家族全員が金を得るために働くようになる（決して強制的にはない）。病弱な父親は次第に元気になり、妹は生き生きとしてくる。ただ母親だけは幸福になるまで少々時間を必要とする。つまり気味の悪い毒虫に変身している息子が度々自分自身を傷つけ、罪の意識に揺りうごかされ、妹に無視され、最後に父親によって生命の核心をつく罰を与えられ、この世を去ってゆくまで彼女は待たねばならないのである。その後すべてはうまくゆく。

世界の秩序がひとたび破壊されると元にはもどらないし、真実も報告されない。しかし必然性に抵抗することはそれがどんな抵抗であれまたそれがたとえ必要であろうともむだなことである、という真実だけはいつの世にも厳然と存在する。こうした必然性とそれに抵抗することの無意味性をカフカは2・3年後父に宛てた手紙のなかで詳細に叙述した。ここで扱った3つの物語はそれぞれの作品の様相をみせながら、この自伝的報告を先取りしたヴァリエーションとなっている。

カフカは世界を拒もうとしたゆえに、生涯自分自身を罰せられるべき人間と考えていた。事実彼は父親の意志に反して作家であった。彼のまわりの人々、とりわけ婚約者が父親と息子のそうした関係を償わねばならなかった。しかし今まで述べてきたように、カフカ自身書くことに賛同し結婚に反対する態度を決めたのも決して

簡単にはなく、充分様々な結果も考えてのことであった。彼は自分自身を簡単にどちらかに属するものと決定してしまえば、父親の手によって傷をうけ回復することのなかったあのグレゴール・ザムザのように滅びてしまうにちがいないことをよく知っていたのである。

「……私はあなたのまえにどっとたち塞がっていますが、どうか私を拒絶してくれることをあなたにお願いします。そうでなければ私たち2人は破滅します」とカフカは1913年8月30日、フェリーツェ宛に書き、さらに2日後には「書くことのために人間としての最大の幸福を放棄する喜びが私の全身に浸透しています」と書いている。実際にはカフカの状況はそんなにはっきりしたものではなかったかもしれないが、ここに表わされているとおりだとすれば、カフカの自伝的作品の解釈者たちが十分な根拠として解釈できるようなカフカの方向性はすでにはっきり示されているといえる。

審判ロマンの「大寺院」の章で最も信頼にあたいる僧にカフカは次のように語らせている（しかもその内容の正しさを裏づけるかのようにそれを信頼できる解釈者たちの語った事柄として引用させている）。「ある事柄の正しい把握と同じ事柄の誤った解釈とは互いに完全に排除し合うものではない」と。

原 注

- 1 参照、ユルゲン・ボルン『フランツ・カフカと批評家たち』（ユルゲン・ボルン他『カフカシンポジウム』、ベルリン、1966年、第2版、127～159頁）151頁。
- 2 ベンヤミンのカフカ論は最初1934年の『ユダヤ展望』に掲載された。この引用は次による。ヴァルター・ベンヤミン『新しい天使』、フランクフルト・アム・マイン、1966年、250頁。
- 3 参照、ユルゲン・ボルン〔注1〕140～146頁。
- 4 ムージルの論評（『新展望』、1916年、第2巻、1421～1426頁）。
- 5 フランツ・カフカ『書簡集1920～1924年』、マックス・ブロート編、フランクフルト・アム・マイン、1958年、116頁。
- 6 フランツ・カフカ『日記1910～1923年』、マックス・ブロート編、フランクフルト・アム・マイン、1954年、第2版、481頁。
- 7 同上、229頁（1912年1月2日）。
- 8 フランツ・カフカ『フェリーツェへの手紙と婚約時代のもうひとつの手紙』、エーリヒ・ヘラー、ユルゲン・ボルン編、フランクフルト・アム・マイン、

- 1967年, 66頁。
- 9 同上, 367頁。
 - 10 同上, 444頁(1913年8月14日の手紙)。
 - 11 ギュンター・アルブレヒト他『ドイツ語圏作家辞典, 原初から現代まで』第1巻, ライプツィヒ, 1972年, 第2版, 435頁。
 - 12 フランツ・カフカ『田舎の結婚準備』, マックス・ブロート編, フランクフルト・アム・マイン, 1966年, 218頁。
 - 13 フランツ・カフカ『ミレーナへの手紙』, ウィリー・ハース編, フランクフルト・アム・マイン, 1966年, 191頁。
 - 14 『日記』〔注6〕 285頁。
 - 15 同上, 294頁。
 - 16 同上, 146頁。
 - 17 『フェリーツェへの手紙』〔注8〕 156頁(1912年12月4・5日)。
 - 18 『日記』〔注6〕 296頁(1913年2月11日)。
 - 19 参照, 1912年11月30日, 1912年12月4・5日, 1912年12月6日, 1913年2月13・14日の手紙。
 - 20 参照, 1913年6月2日の手紙。
 - 21 『日記』〔注6〕, 315頁(最初の出会いの一年後, 1913年8月13日)。
 - 22 『日記』〔注6〕, 311頁, (1913年7月21日)。
 - 23 マックス・ブロート『フランツ・カフカ』, フランクフルト・アム・マイン, 1974年, 114頁。
 - 24 『フェリーツェへの手紙』〔注8〕, 412頁(1913年6月26日)。
 - 25 『日記』〔注6〕, 448頁(1914年12月13日)。
 - 26 マックス・ブロート〔注23〕, 113頁。
 - 27 『書簡集』〔注5〕, 115頁(1913年4月4日)。
 - 28 以下の考えは部分的には次の本の有名な跋文執筆者の美しい『火夫』解釈に負っていることをここに付記する。フランツ・カフカ『火夫』, ベンノー・フォン・ヴィーゼの跋文, フランクフルト・アム・マイン, 1975年(=ズールカンプ双書464) 57~84頁。
 - 29 『フェリーツェへの手紙』〔注8〕, 163頁(1912年12月6・7日)。

〔訳者跋: 家族関係においてカフカの位置をみつけたそうとするこの論文の主眼は

従来のカフカ研究の継承であり、さして目新しいものでもないかもしれない。そんな論文の翻訳を思い立った動機は最近翻訳された、カフカ像に全く新しい光をあてたドゥルーズ＝ガタリのカフカ論（「父の問題は父に対してどのように自由になるかということではなく、父が見出さなかった場所でどのようにひとつの道を見出すかということである」）に出会ったことからであるといっていいたいだろう。カフカと父親との関係からカフカを論じようとする従来のカフカ研究を否定するこのカフカ解釈に、訳者も例にもれず、その設定の新しさ故に魅かれ理解を試みた。しかしながらこれはなかなか自分のものとするには骨のおれる代物であった、そんな時たまたま訳者のまえに現れたのがこのエラースのカフカ論である。従来のカフカ解釈の再検討と、ドゥルーズ＝ガタリのカフカ解釈の理解と、そしてそっと付け加えるならば語学力の練習（誤訳が多いのでは？……）があえて翻訳を試みた率直なところである。なお著者のノルベルト・エラースはシラーに関する著作の多いボン大学のゲルマニストである。また原題、出典は Norbert Oellers : DIE BESTRAFUNG DER SÖHNE Zu Kafkas Erzählungen ‚Das Urteil‘ ‚Der Heizer‘ und ‚Die Verwandlung‘, in : Deutsche Philologie 97 Sonderheft, 1978 / 9, S.70 – 80. である。]